

社会的共通資本と土木

京都大学大学院 藤井聡

○社会的共通資本 (social overhead capital)

「一つの国ないし特定の地域のすべての人々が豊かな経済生活を営み、すぐれた文化を形成し、人間的に魅力在る社会を持続的、安定的に維持することを可能とするような社会的装置 (p, ii)」

社会的共通資本＝自然環境：大気、森林、河川、水、土壌など

＝社会的インフラストラクチャー：道路、交通機関、上下水道など

＝制度資本：教育、医療、司法、金融制度など

○土木

- ・ 「土木とは、我々の社会に存在する様々な土木施設（＝環境の中に有形のものとしてヒトが創出したもの＊）を「整備」し、そしてそれを「運用」していくことを通じて、我々の社会をより良い社会へと少しずつ改善していこうとする社会的な営みを意味する。」（藤井著『土木計画学』、2008より）

※ ダムや道路といった「設備」に限らず、切り土や盛り土、のり面等も、土木施設に含まれる。

- ・ （土木とは）「偉大なる自然の中で、小さな存在にしか過ぎない人間達が手を携えて、生きていこうと戦い続ける」という営為（大石・藤井著『国土学』、2016より）

○「社会的共通資本論」の起源は「自動車の社会的費用」であり「新自由主義批判」である。

→ 近代的土木政策を批判（クルマ社会化を加速するような「新自由主義的土木」に対する批判）

「もともと、社会的共通資本の考え方は、自動車の社会的費用の概念を明確に理解するために考え出されたものであった」（p.105）

自動車の社会的費用＝インフラ費用、事故、公害、自然破壊（＋伝統風土破壊、人間疎外）

＝社会的共通資本を破壊するものと定位できる。 例えはのために....

「ジェイコブスの都市論」を採択すべし（！①街路は補く短く曲がらせて、②古い建物残す、

③土地利用は純化せず混合型で、④人口密度の高い「コンパクト」年に） p.120

→ それは理論的に言えば、「新古典派経済学／新自由主義経」に対する実践的批判であった。

・ ①希少資源私有制、②マリアブル生産要素、③公平性無視（効率性のみ）、（④市場均衡の安定性）

・ 第一の危機（世界恐慌）→ケインズ革命で（②④を考慮し）乗り越えたが....

・ 第二の危機（格差と貧困）が、「新自由主義」でさらに拡大（例：クルマ問題）・・・

→これを乗り越えるために、①③を考慮した「政府・公共が積極的に役割を果たす社会的

共通資本論」が必要だ！（p.43）と主張（※そのために「広い意味での政府、公共部門の

果たしている機能を経済学的にとらえなお」p.24すべし、というのが、社会的共通資本論）

○「社会的共通資本」論の発展には、「経済学と国土学/土木計画学の融合」が必須である。

①社会的共通資本の形成の実践論を深化すべき → 社会現象を見据えた計画・戦略が必須）

②そのためにも「ハードインフラ形成の役割」を客観的に認識すべき（軽視してはならない！）

「自然環境が文化＝（広義の）慣習・社会的制度を作る」（p.212）

↑自然環境とは、実際には「純自然＋装置インフラ」、だから土木でつくられる！

（そして、土木は、慣習・社会制度→政治によって行われる）

インフラ（下部構造＝国土）

スープラ（上部構造＝社会的制度・政治・社会）

（大石・藤井『国土学』より）

＜社会的共通資本論は、煎じ詰めれば、この「スープラ・インフラ循環」を良好に加速させていくための実践的理論として発展すべきものと、定位できる＞